

もよおす(催) やおら(徐々)

五六八

もよおす(催)

モヨホス

一 契沖

催 もよほす。『萬葉』にモヤハシとも。編者いふ

傍訓なるべけれど未だ見當らず。

(和字正濫鈔三の四一丁)

谷川士清の『倭訓栞』にも、『もよほす 催をよめり。『萬葉集』にモヤハシともいへり。もやふ義なるべし。ハス反フ也』といひ、

加茂季鷹の『正誤かな遣』寺田長興の『太津可豆衛』またモヤハシを引きてホの假名遣とせり。

二 楫取魚彦

もよほす 春虫の漸もこよひ出るよりい

ふべし。催。

(古言梯)

三 大石千引

モヨホス 催 招呼す。

(言元梯)

やおら(徐々)

一 ヤヲラ

一 楫取魚彦

やをら 或書に和字當たるは、意は似て

假字違へり。和は也波、弱は與倭也。耶は與、乎は倭に通ふ。弱。

(古言梯)

谷川士清も『倭訓栞』に、『やをら』『源氏物語』に見えたり。弱き意也。ヤヲとヨワと通ぜり。ソロソロといふにひとしく、ソツトといふ意也』といひ、鈴木脰(雅語譯解) 市岡猛彦(雅言假字格) 春登(假字音便

撮要)等また弱の義とし、

『俚言集覽』愚按および物集高見(かなづかひ教科書)また『古言梯』の説に従ひてヲの假名遣とせり。

物集高世は魚彦がやをらは和の義にあらずといへるを駁して、『支言考』二七に、「ヤハはヨワ弱と通へり。

やはき物はよわく、よわき物はやはき意あるゆゑなり。

『古言梯』にヤヲラといふ言を註して、「……」とい

へるはさる事なれど、それはヤハとヨワとを別の言と

してつかひわくる時の事にこそあれ。言の本をおしき

はむる時はヨワもヤハも同言なる事疑なきなり。され

ばヤヲラもまたヤハラともいひて源氏に「やはらづ、引い

あり。即ヤヲラなり。假字も通はしてかけるをや。ハとヲとは通はねど

言なる故に、ヨワといふ時ハとヲとは通はねどといへり。ヤヲラの假名遣を

否定したるにはあらざれど、ヤハラなりといふ一説ま

た和の意にて弱の意にあらずといへる説につきて、參

やあら(徐々)

考すべき説なればこゝに抄録せり。

二 村田春海

やをら 『古本今昔物語』に和の字を書

り。ヤハラと同じ詞にて『狭衣』に「戸のやはらあくおとし

て」と有を、一本にはやをらと有。こはヤハラを音便にヤ

ヲラといへる也。

ヲはウと通へばヤウラといふべきをヤヲラといへる也。

編者いふ、物類稱呼(五の一〇丁)に、「やをら 西國および常陸にてヤウラと云。そろくといふ事に用ひていふ」とあり。ハヒフ

へをウと云は音便の常也。

『古言梯』に與和良と同じ詞にて弱字の意なりと有は違

へり。

(假字拾要)

大槻文彦が『言海』に「やをら 弱の轉と云。さ

れどヤハラといふも同語なるべければ柔なるべし」と

いへるも同説なるべきか。

なほヤヲラの語義を和の意に解せるは、はやく契沖

の『源註拾遺』國文注釋全 書本二一頁に『やをらはヤハラカにて柔

らかなり。他の物語にはすなはちヤハラといへる所も

あり。俗にソロリといふにかなへり』和字正濫

あり。俗にソロリといふにかなへり』和字正濫

あり。俗にソロリといふにかなへり』和字正濫

あり。俗にソロリといふにかなへり』和字正濫

あり。俗にソロリといふにかなへり』和字正濫

あり。俗にソロリといふにかなへり』和字正濫

あり。俗にソロリといふにかなへり』和字正濫

また『増補語林倭訓栞』に、伴信友も和ラの意と解

していはく、『大和物語』「やをらすべり入て」『源

氏物語』薄雲「やはらづ、引いり給ひぬるけしきなれば」

『玉海』「治承四年二月四日丙戌祈年祭也云々上卿拍手法 不法不令有

手ノサキヲアハセテ、ヤヲラ打合也」『一條禪閣江次

第抄』「今按、上卿拍手ノ作法不令有。手のさきをあは

せてやをらくと打合也」これら考合すべし』といへり。

三 賀茂真淵

『西要抄言釋』

全集第四の 三九九五頁

に『やをら

此

言ヤ、ウラクてふ言を後に略しいへるにて古言にはあらず。『今昔物語』に和の字を用ゐしは、意はさる事にて假字かなはず』といひ、

『源氏物語新釋』

全集第五の 四九三〇頁

に、薄雲の卷なるやはらづといふ語を解して、『ヤハラヅ、といへる語なし。今は和と

いふに同じく聞ゆ。さてやをらすしづつ引入給ふをいふなり』といへり。

四 高橋殘夢

やをら

彌折ア

と云義なるをリアをラと

約めてヤヲラと云。よてヲ也。身を彌折顯はると云義なり。

(國字定源上の一五丁)

此の他、近藤真琴の『ことはのその』小田清雄の『國

語かなつかひ早學』笹村良昌の『假字の栞』落合直文の『詞の泉』等またヲの假名遣とせり。

二 ヤホラ

小山田與清

『松屋筆記』

國書刊行會本第一の二六〇頁

に、「やはら

并やはらづし。

ヤホラといふ詞は物語文にいとおほし。

『舊本今昔物語』に和ラと數所書たれば、也保良の假名なる

ことうつなさを、人みなヤホラと書くはあやまり也。『宇治

拾遺』にはヤハラとも有。也波良にて和ラと有もおなじ。

語意は和かなるより起りて、俗にいふソツト又はシヅカ

ニなどと通ふめり。『源氏』薄雲湖月抄卅四丁ウに、「やはらづし引

いり給ふ」と見ゆ。『孟津抄』に「ちとづし引入給ふ也」

とさへり」とさへり。

三 未定

やつかい(厄介)

加茂季鷹の『正誤かな遣』やをらの條に「やをらやはら
和」とあげ、細注に「やをらのかな未詳」と記せり。

やつかい(厄介)

一 ヤククワイ

貝原好古

『和爾雅』

卷八の六丁に

「羅ニ厄會」

出ニ于

『文選』王命論或作ニ厄會見ニ于『後漢書』二十三卷」とい

へり。『諺草』卷五の三丁にも出でたり。

横島昭武も『合類大節用集』九上の一丁に「厄介ヤククワイ今

按宜ニ用ニ厄會字ニ乎。『文選』王命論羅ニ厄會竊ニ其

權柄チ」といひ、

小中村清矩も『洋々社談』

五七號、俗語の根據

に「厄會『本

朝續文粹』七、仙院御報書に「非ニ雷厄會之可惶兼傷ニ

凋殘之難_レ救_レ 又『朝野群載』三、江帥祭文に「然_ラバ
則_レ厄會不祥_遠 他方ニ拂却天_レ」とみえて災厄の意より出
たる詞也』といへり。

二 ヤクカイ

谷川士清 やくかい 王命論に「罹_レ厄會」と見え
るは轉訛せるなるべし。或は役介とかけり。

(倭訓 栞)

『俚言集覽』に「厄介 俗用又役害とも書」とい
ひ、大槻文彦(言海)は役介・厄介の字を、物集高見(日
本大辭林)落合直文(ことばの泉)は厄介の字を書し、
共にヤクカイの假名遣とせり。

三 ヤクカヒ

小山田與清

『文選』

六臣注本五十
二卷四丁右

班彪が王命論に

「故雖_下遭_レ罹_レ厄會_ニ竊_ニ其權柄_ニ勇如_ニ信布_ニ彊如_ニ梁籍_ニ成如_中
王莽_上云々」と見えて、罹_ニ厄會_ニとは、厄難の會集せる時に
罹_ルよし也。されば今俗に「ヤツカイニ預ル」「ヤツカイニ成
ル」「ヤツカイ者」などいふとは義別也。

按にヤツカイは家抱_{ヤカカヒ}にてヤカカへと云を訛れる辭とさこ
ゆ。さてはヤツカヒと書べし。其家_ヤにかゝづらひて介抱せ
らるゝよし也。

(松屋筆記 國書刊行會本第二の五三四頁)

やもう(病)

すもう(相撲)むこ
う(向)の條參照

一 ヤマフ

一 清水濱臣

やまふ

病。

『水鏡』中「佛像をやさし

つみによりて、此_{やまふ}おこれりし也」『續後拾遺集』雜下

「やまふにわづらひけるがすこしおこたりて」

(語林類葉)

二 中島廣足

後世の俗書にやまひの床など書べき所を、やまふの床とかけるあり。そは俗書のみにはあらず。『續後拾遺集』の歌のはし詞に「やまふにわづらひけるが、すこしおこたり侍ければ、云々」とあり。此ころよりの訛なるべし。

さてこは「やまひにわづらひ」といふべき所をかくいへれば、やまふは躰語にてやまひの音便なるべくおもはるれば、ヤマフと書はあたらず。ヤマウとかくべしとはやくおもひしに、『散木集』に「とがりするさつをのゆづるうちたえてあたらぬ君にやまふころかな」といふ歌あり。此やまふは正しく用語にて、「あたらぬ君にやむ」といふ心なれば、やむといふ詞のムを延てマフといひしものなるべし。然るを後に訛りて、躰語に用ふるやうになりしより、や

やもう(病)

まひもやまふもおなじ語とつひにこゝろ得誤り來りしなるべし。

さらば音便にはあらねば、やまふとフをかきてよろしけれど、其もと訛りし言なれば、躰語の時は正しくヤマヒといふべきことにこそ。

(櫃のしづえ下の三〇丁)

此の他、橋 成員の『倭字古今通例全書』に「やまひ。やまふとも。『土左日記』に病者と書てヤマフビトと訓す」といへり。

二 ヤマウ

物集高見 やまう 病。やまひのおんべんとなへ。『續後拾遺集』「やまうに煩ひけるがすこしをこたり侍りければ」

(日本大辭林)

落合直文が『ことばの泉』の説またあなじ。

ゆい

ユヒ

一 谷川士清

ゆひ 田うゝるに、互に人を傭て植るを

いふといへり。

編者いふ、和歌童蒙抄(第七。早苗條)和歌色葉集(下卷の五八丁)等に見えたり。和よて「ゆ

ひの手間入」ともよめり。越前に田結神社あり。此義なるにや。又ユヒは傭の音轉なるべしともいへり。今俗田ゆひといひ、信濃にてよひといふは、ユ・ヨ通ず。……『堀川百首』に「残る田はそしるに過じ明日はたゞゆひもやとはで早苗取てん」

(倭 訓 栞)

二 『成形圖説』

『本書』卷八の二三丁に『由比』凡契約の事

をユヒといふ。心を同し力を合する謂也。猶與力同心などといふがごとし。……伊比。盖五家結の畧なり。又延

比とも云は、イヘユヒのイを省けるなり』と説き、組合郷

保五人組・保社・鄰伍・五保・同保・保甲等を同一名稱なりとし

て、『農夫の保は第一貧富を入交て親疎なく、方限の中に

組合ありて隣次にはかかはらず、親兄弟といへども貧なる

は富ると組み富るは貧なると配り合て、平等の交を結び、縦

ひ他組なりとも、事に支られ或は力の足ざる時は、互に助合

救賑て、一村睦じく、公法を背ず、義讓を守ることにて誠に

王代の遺風なり。『唐律』にも「同伍單弱比伍爲告」と見

えたり。……』といひ、

なほ『ゆひは耕作の爲斗にあらず。村中惣百姓相續の

法なり。しかるにゆひといへば小百姓以下の者のするわざ

にて、大百姓はゆひするなしとおもへるは大なる僻事なり。

……ゆひとは久しき世より傳はりし詞也。古歌に「ゆひ

する人やかなるらん三ふし立まで早苗とらぬは」 是延喜

帝の御製なりとて武田信玄此大御歌を引て、奉行頭人に示

されたり甲陽軍鑑……又冷泉爲尹の歌に「そしろにもたらぬ庭

田の早苗草ゆひの手まはる程だにもなし」千首……又隆源法

師が歌に「のこる田はそしろに過じ明日はたゞゆひもやと

はて早苗とりてん」堀河百首……』といへる續 貫行の説を舉

げたり。

大槻文彦の『言海』に『ゆひ 結の義。相連る、

意かと云』といへり。

三 村田春海

ゆひ 此詞『堀川百首』の歌にも有て、

中頃より後の歌にも是かれあり。 考にヤトの反ヨなる

をユに通はして、ヤトヒをつめてユヒといへるなるべし。

(假字拾要)

契沖(和字正濫鈔二の三)『俚言集覽』物集高見(日本

大辭林) 落合直文(ことばの泉)等またユヒの假名遣

ゆうまどい

とせり。

『増補雅言集覽』に『ゆひ ……○弘訓云、陸奥・出

羽にては、たがひにする事をユヒといふ。互に按摩を

するをユヒアンマといふ類なり』といへり。

● 参考

松永貞徳の『堀川百首肝要抄』二の二に『ゆるは賃を取

て人の用をさく者也。たとへば筆耕をとりてかくをば、詩

にも庸書といへり。庸ヨウの字をユキユキとよむなり。當世の日庸

とてやとはれありくも此類也』といへり。小幡正信も詩林拾葉

「ゆひとは則雇ユイといふ字をかく也。庸は吳の原音イユウ次音ユウな

れば其の轉音とせばユイの假名遣説とすべきが如し。

ゆうまどい

一 ユフマドヒ

一 賀茂眞淵

夕まどひ 夕まどろみを略して。今もよひまどひといふ。

(源氏物語新釋全集第五の四六三七頁)

萩原廣道の『源氏物語評釋』六の一に、「夕まどひ

よひよりねぶりたるをいふなるべし。『新釋』に、「ゆふまどろみの略」とあるはいかゞあらん。されど意はたがはず」といへり。

二 『俚言集覽』愚按

夕まどひ 『倭字通例書』「ユフマドヒ、夕轉。注附 ユフトッロキ、夕轟。戀の詞」 愚

案、轉をマドヒと訓るを見ればマトは圓にて圓轉の義。その圓をはたらかしてマトヒといふなり。俗、賠償をマドフといふも、亦圓轉にて、またくかへすの義也。惑の義にはあらず。然れども惑をマドフと訓る本の義は亦圓轉の義なる

べし。惑といふものは、右か左かとくら／＼する故に圓轉の義あり。夕轟といふも車の圓轉する義なり。

三 清水光房

ゆふまどひ 光房云初夜惑寢也。ヒイの

約ヒ也。老人のねぶたさに急てぬるをいふ。『新撰六帖』ひとりね 「待ち侘てさわぐ心の夕まどひぬるとはなくてねられもやせん」 此歌も戀人を待ち侘てさわぎまどふ心を、やがて夕まどひにいひよせて、心のさわぎまどふまゝになすわざもえせずして、とくいねてぬるとしもなくねられもやせんと、はかなきさまによめり。『源氏』末摘花に 「老人などは、さうしに入ふして夕まどひしたる程也云々」とあり。

(落窪物語證解國文注釋全書本七〇九頁)

清水濱臣の『語林類葉』に 『源氏物語』未つむ花 「老人

などはさうしに入ふして夕まどひしたるほど也」是はよひより早くねたるを云也。此かた本義なるべし。 『新撰六帖』ひとりね、 「待侘てさわぐ

心の夕まどひぬるとはなくてねられもやせん」是はねそ
びれたる方にいへるなり。』といへり。光房は此の説を踏襲したる
轉誤ならん。』
ものゝ如し。

物集高見の『日本大辭林』落合直文の『詞の泉』と
もに、夕惑の義とし、夕方より早くまどろむ意とせり。

橘 成員(和字古今通例全書) 谷川士清(倭訓栞) 石
川雅望(雅言集覽)等またヒの假名遣とせり。

二 ユフマドイ

村田春海

ゆふまどい

夕まどろみの略なり。『源

氏』末摘花に「ゆふまどいしたる程也」といへり。

(假字拾要)

ようじよう(横笛)

ようじよう(横笛)

一 ヨウデウ

一 山岡俊明

『類聚名物考』第六冊の
四四四頁に

『ようてう 笛

の異名歟。『義經記』一舍那王殿鞍馬出の所。「承安二年
二月二日の曙に鞍馬をぞ出給ふ。云々。我ならぬ人のちと
づれて、返らなびにさる者此に有りしぞと思ひ出て、あと
をもとぶらひ給へかしと思はれければ、かんちくのようて
うを取出し、半時ばかりふきて、音をだにあとのかたみと
て、なくく鞍馬を出給ひ云々」かんちくのようてうとは
漢竹の笛なり。ようてうは異名歟。笛の音はほそくながう
つゞきて有れば羊腸などにやたとへけん。未考或人云朝
鮮の方言なりと』

『同書』同、六
八九頁に『ようてう 笛の事。『義經記』一、鞍

馬出の處。「かんちくのようてうを取出し、半時ばかり吹
て云々」笛、唐音デウなり。瑤、ヨウなれば、玉の笛といふ

意歟。吳音[●]チャク[●]なり。チャクはチャウとかよへり。ヨウは瑩歟。又腰笛の音歟」

『同書』^{同、四頁}に「腰笛。ようでう 物語・謠曲に「腰の

えうでうぬき出し」といへるは腰のふえを拔出しといふべきを、事有りげにいはんとて、腰笛をすなはち笛の異名の如く覚えて書しなり。笛の唐音はデウなり。それを假名のまゝにテウの如くとなふるなり。笛を即エウテウといふ事は未見あたらず。又案に横笛[●]又は瑤笛[●]の音語歟」

二 山田以文

横笛^{ヨウデウ} 『平家談』ようでう。按ずるに永

保元年二月十日『水左記』改元條云、「人々申云永長對馬音似[●]笛名[●]」これ其證とするに足る。ワウテキと云へば其音王敵に通ずるを以ての義歟。猶後考を俟。

(錦所談 百家説林續編上の二八三頁)

二 ヨウデフ

伴 蒿蹊

笛をヨウデウと『平家物がたり』などに

書たり。笛の事とはしりても、其由をさだかにせる人なし。『體源抄』は樂家の書なるに、笛の下に腰打^{ヨウテウ}といふ字を小書にしたるのみ。腰打とても其義辨へがたきを、おのれ思ひえたり。是は横笛の字を吳音によめるにて、何の子細もなきこと歟。笛は入聲の字にて、テキに通ひテフと書べきをテウと誤るより辨へがたく成しならん。又笛字チャクともよむことは、笙^{シヤウ}・笛^{チヤク}・琴^{キン}・篋^{クワ}と連続したる語にてしらる。同じ字も昔よりのならはしにて、唱へ轉ずるなり。

(閑田耕筆 百家説林續編下の二七八頁)

三 ヤウデウ

谷川士清

やうでう 『平家物語』に「腰よりやう

でう拔出し、ちつと鳴して」といへるは横笛の音轉。對馬音なるべし。『中山大納言記』に見えたり。

或は「ヤウシヤウにて陽聲の音。笛の異名なり。陽聲調は横鐘管をもて、冬至の氣を候ふ。よて陽氣の動くをもて名を得たる也」といへり。

(倭訓栞)

四 ヤウデフ

物集高見

やうてふ

横笛。よこぶえに同じ。

ワウデキ横笛

を入聲によびなしたるなれば假字もヤウデフなるべし。

(日本大辭林)

五 エウヂヤウ

小山田與清

笛をエウヂヤウといふ事、『義經記』七

八丁オ・廿四丁ウ・廿五丁ウ・廿六丁ウ

北國落の條に見ゆ。『盛衰記』廿五十七丁オ

『體源抄』五三丁オ 笛の條 『續教訓抄』十一一丁オ・三丁オ・四丁オ

(松屋筆記 國書刊行會本、第二の五五九頁)

よこある(横)

六 ヤウデフ・ヤウヂヤウ

落合直文の「ことばの泉」に「やうてふ 横笛。よこぶえにおなじ」 「やうぢやう 横笛。やうてふにおなじ」

よこおる(横)

一 ヨコホル

一 源 俊頼

『俊秘抄』

歌學文庫二の五九頁「かひがねをさやにも

みしかけしれなくよこをりふせるさやの中山」の解に、

「よこをりふせるとは、ことのほかにかかくながき山なれば、よこおりに

編者いふ、顯昭が袖中抄に引けるには四郡とかけり。はゞかりてかひのしら

ねをふたげてみせねばよめるなり」といへり。

藤原仲實の『綺語抄』歌學文庫二の四四頁に「とほつあふみ

とするがのとのあひだに、さやのなかやまといふ山のあるが、四箇にはぐかりて、甲斐のしらねと云山をみせぬなり」とあり。「四箇にはぐかりて」とあるは『俊秘抄』を参照するに、四郡の意と聞えれば、誤字脱字などのあるなるべし。然らば俊頼の説は、既に仲實のいふ所なりしなり。『顯昭古今集註』續々群書類從第一五の一七三頁に引ける藤原教長の説また四郡の意とせり。

藤原清輔、四郡の説について『奥義抄』歌學文庫一の一〇七頁に、

『ある人の云、さやの中山は四郡にわたりてあれば「よこほりこせる」とはよめる也。「よこほりくやる」とかきたる本はひがこと也。「よこほりす」といふことなしと申せども、『土佐の日記』には、「ひんがしのかたに山のよこほれるをとへば、やはたのみやといふに」と侍り。さる詞もあるにこそ。やはた山四郡にわたれ

りとも見えねば、ひがきにはよもあらじ。但よき本に「よこほりこせる」とはべるぞあやしき」といへり。

藤原範兼も『和歌童蒙抄』國文注釋全書本の三一頁に『土佐日記』

を引きて横たはれる意とせり。顯昭も(袖中抄歌學文庫一の一二七頁)「よこほりこせる」とは、ふせると云詞なり。或本にくやるとかけるも、ふせると云詞なり。ふせるとかける本もあれど、それはあまねからず。證本とおぼしきはこせると云へり」といひ、古語こやせるを引きて、『ふせるといひ、こやせると云は同心なり。こせるといふもヤの字を略せるなり。くやると云も、コとクとは同五音なり。さてセの字を略していへるなり。それをあしく心えたる人、よこほりとは四郡也。こせるとは四郡に越たるといふはいはれず。よこほりとはよこたはゆる心なり」と説けり。編者いふ、四郡の説の非なるはいふ迄もなし只古き説なればこ

これに關せる説を併せて
この條に出せるなり。

二 清水濱臣

今おもふにホの假字なること明らかし。

いかにとなれば、『古本風俗歌譜』甲斐に、此歌をあけて、
「與古保利太天流」とあり。

又『袖中抄』に舉し四郡の説も、もとより義はとりもち
ふるにたらねども、ヨコホリのかなの證にはなすにたれり。
いかにとなれば此四郡をヨコホリの假字と心得んことは、
いにしへいまにかよはしてなきことなれば、ヨコホリの假
字ならんにはいかでふるく四郡の意にはあやまりつたふべ
き。こもヨコホリと書來れる明證也。

さてヨコホリと書て、こゝろは則よこたはる意也。ホは
かるく心得べし。尤半濁にてヲの如く唱ふべし。くつほる
のホと同じ編者いふ、なほくずお
るの條を参照すべし。

(答問雜稿一の二五丁)

三 香川景樹

よこほれるはヨコフレルにて、横ふるを

よこおる(横)

のばへいふ也。フリは様にて、宮ぶり手ぶりなどのフリ也。
フをホといふは音便にて、畢竟よこさまといふに其意かは
ることなし。『古今』に「よこほりふせるさやの中山」と
あるも、横ふりふせるにて、みな横さまに靡きたる山のすが
たをいへり。

(土佐日記創見下之末の四〇丁)

四 橘 守部

横は常によこたはるとも活けり。其波を
保に轉じてよこほるとはいへるなり。いとほし
おもはゆる・おもほゆるなど云類をあはせみればとみにし
らるゝことなり。

(鐘の響下の二三三丁)

五 富士谷御杖

よこほるといふ詞、横折とかける本あ
りて、宇萬伎ぬし・菅蹊ぬしなど、ヲもじにつきて折の義な
りといはれき。しからば堅なるべきものを、横さまに折れ
る形容にていふ詞なるべし。

されど『萬葉集』卷四 「衣手爾取等騰己保里哭兒爾毛

益有吾乎置而如何將爲」 又卷五長歌上 「漸々爾可多知

都久保里朝々伊布許登夜美靈剋伊乃知多延奴禮云々」 又

た卷十九に 「伊伎騰保流許己呂乃宇知乎思延宇禮之備奈

我良云々」長歌上 これらのとどこほるつくほりいさど

ほるといふホルとおなじ例なる詞にやとおぼしければ、ホ

ルとあらんぞしかるべき。

(土佐日記燈下の二六八丁)

六 大槻文彦

よこほる 横。横を活用せる語。横折る

の義とするはあらず。自他違へり。

(言 海)

橘 成員(倭字古今通例全書よこたへの條) 本居宣長(古今

集遠鏡全集第五の七七八頁) 石川雅望(雅言集覽) 近藤真琴(こと

はその) 佐藤誠實(語學指南三の二七丁) 物集高見(日本

大辭林) 落合直文(詞の泉) 笹村良昌(假字の栞) 等

ホの假名とし横たはるの義とせり。

二 ヨコヲル

賀茂眞淵

横折くやるは横折臥にて、よこたをりふ

せるなり。クヤルは古言なり。今の本にふせりと有はいに

しへならず。仍て改めつ。

(古今和歌集打聽全集第一の一一九七頁)

松永貞徳の『歌林樸榦』九に 「四郡ヨコホリの説は諸抄に

不用。『土佐記』をひけば横折の説を可用』とあれば、

横折の説は古くより唱へし説なり。

契沖が『古今餘材抄』國文注釋全書に、よこをりとヲの

假名を書けるは同じく横折の説なるべきか。

有賀長伯(和歌八重垣卷五の二〇丁) 谷川士清(倭訓栞) 岸

本由豆流(土佐日記考證下の三六丁) 又横折の義とし、『俚

言集覽』小田清雄(標註土佐日記講義)もヲの假名を書